

# ルネサンスが咲き誇った「花の都」フィレンツェの歴史地区

～ ようこそボッティチェリの世界へ ～



ボッティチェリの絵をお好きな方は多いのではないのでしょうか。私もそのひとりです。

特に『プリマヴェーラ（春）』と『ヴィーナスの誕生』、この2作品には、何とも言い難い独特の世界観があります。日本人の中にはヨーロッパの中世絵画をどことなく重たく感じる方も少なくありませんが、ボッティチェリの絵には、そういった印象はなく、逆に明るく軽やかな感じがしますよね。なぜなのでしょう。不思議に思っていましたが、よくこの2枚の絵を観察すると、色々なことがわかってきます。

世界遺産「ウフィッツィ美術館」の至宝と謳われる、この2枚。今回は、このサンドロ・ボッティチェリ（1445年～1510年）の名画を追ってみたいと思います。

——と、その前に。

ルネサンスの絵画を紐解くには、ルネサンスの歴史を知る必要がありますので、まずはその歴史を振り返りましょう。

ルネサンスとは「再生」を意味し、古代ギリシャやローマへ立ち返って学び直そう、というもので、14世紀から16世紀にかけて、イタリアで始まり西欧各国に広まった、芸術・思想の新しい動きのことを指します。キリスト教による神聖的な世界観から「人間中心」の世界観への転換がはかられました。フィレンツェでルネサンス芸術、特に絵画が本格的に開花したのは、1434年に、コジモ・デ・メディチ（1389年～1464年）が実権を握ってから孫のロレンツォ・デ・メディチ（1449年～1492年）が亡くなるまでの、およそ約60年間です。メディチ家の庇護を受けた画家ボッティチェリや若かりし日の彫刻家ミケランジェロなどが活躍しました。強大な権力を持っていたロレンツォ・デ・メディチの死後、ドミニコ会修士サヴォナローラによるメディチ家統治時代の贅沢の粛清、芸術作品の焼却、ローマ教皇ユリウス2世の権力の拡大化などで、徐々にルネサンスの中心はフィレンツェからローマへと移っていきました。ボッティチェリは庇護者を失い、絵画のスタイルを変えざるを得なくなり、その後は目立った活躍ができなくなったのは勿体無いことです。ルネサンスの中心がローマに移ってからは、ローマでミケランジェロやラファエロがその才能を発揮しました。ルネサンスはフィレンツェとローマで開花した時期を合わせても、およそ100年と、意外と短かったのです。

簡単ではありますが、ルネサンスを復習してみました。

それでは、時代背景などを踏まえた上で、ボッティチェリの代表作『プリマヴェーラ（春）』と『ヴィーナスの誕生』について解説させていただきます。

●『プリマヴェーラ（春）』／1482年頃制作、縦203 cm × 横314 cm 板に描いたテンペラ画



『プリマヴェーラ（春）』1482年頃／ウフィッツィ美術館蔵

・美術史からみた一般的な作品解釈

この作品は、向かって右から左へとストーリーが展開します。右端にいるのは春風を運ぶゼピュロス。ゼピュロスが妖精のクロリスと結び付き、クロリスは春の女神となってバラを撒いています。中央に立つのはアフロディーテ（ヴィーナス）。頭上のキューピットが、三美神の横向きの女神に向かって矢を射ようとしています。その女神の視線の先には、左端にいる商売の神ヘルメス。杖で何かを払っています。それは“雲”なのか、“冬”という季節なのか、ヘルメスの仕草は謎めいていて見解が分かれるところです。春の到来、もしくは、何か期待できることの到来を描いたものです。

※神々の名称は、一般的なギリシャ神話での表記に準じています。

・絵画技法からみた作品分析

両端をゼピュロスとヘルメスの男性ふたりで固めています。ヴィーナスを少し高い位置にして、頭上にキューピットを描く。これにより、三角形の構図となります。木々や地面の草などを深緑色にして、人物（神々）を目立たせ、また、ヴィーナスの周りの木々や女神を囲むように円形することで、神々しさを醸し出しています。そして、空も透けるようなブルーで奥行きを出し、画面全体が窮屈にならないような工夫をしています。一方、女神のスカートを赤くして、視線が集まるようにもしています。花々と果物も深緑色が重たくなならないように散りばめ、絵を中心で縦に区切っても横に区切っても、同じような面積で描かれていて、たいへん整った構図です。このように、画面構成をバランスよく成り立たせるためのテクニックが、随所に見られます。

ただし、気になることが1点。主役は中央のヴィーナスですが、春の女神もほぼ正面を向いていて、こちらも主役に近い役目を果たしています。ボッティチェリ本人としては、画面構成上、もう少し抑え気味に描きたかったのかもしれませんが。しかしこの時代、依頼主の注文通りに描くことが重要だったので、それは致し方のないことです。

● 「ヴィーナスの誕生」 / 1483年～1485年頃制作、縦約173 cm × 横約279 cm キャンバスに描いたテンペラ画



『ヴィーナスの誕生』 1483年～1485年頃 / ウフィッツィ美術館蔵

・ 美術史からみた一般的な作品解釈

『プリマヴェーラ（春）』と同じ登場人物（神々）が描かれています。左端のふたりは、風を運ぶ神ゼピュロスと妖精のクロリス（フローラ）です。ゼピュロスは西風をアフロディーテ（ヴィーナス）に吹きかけ、その風でヴィーナスはホタテ貝に乗って岸边に上がろうとしています。そして、ヴィーナスに外套をかけようとしているのが、季節の女神ホーラという設定です。この作品の登場人物は4人。水面からヴィーナスが現れ、陸地に上がろうとする場面を描いたものです。

※神々の名称は、一般的なギリシャ神話での表記に準じています。

・ 絵画技法からみた作品分析

2017年5月17日付けの「第2回マイスターのささやき」で、『ヴィーナスの誕生』について、以下のように評させていただきました。

——ボッティチェリの『ヴィーナスの誕生』と「浮世絵」には共通するものがあります。

えっ？と思われるかもしれませんが、はっきりとした輪郭線、大胆に人物をデフォルメしていること、絵に立体感がないことが認められます。

それらが逆に、観る者に時代を超えた不思議で新鮮な魅力を与えているのです。——

この作品を観ていると、まるでファンタジー世界に引き込まれるような感じがします。「色のトーン」と「曲線美」が秀逸です。水面を薄いコバルトブルーで描き、女神は透けるような肌色で仕上げ、まるで「グラデーションのような柔らかさ」を醸し出しています。“海は青色”という概念で着色されていたら、メリハリが強調されるだけに留まったでしょう。この作品の、何とも言いえない美しさは、空、水面、女神と貝殻の「色のトーン」にあるのです。加えて、優美な曲線が、ヴィーナスの首から肩にかけてだけでなく4人それぞれが、指先から爪先まで流れるように描かれています。この滑らかさが、この作品に優雅さと気品を感じさせるのです。



『プリマヴェーラ（春）』と『ヴィーナスの誕生』に共通するものを考えてみると、いずれもギリシャ神話を題材にしています。また、テーマが明るいですよ。キリスト教の教えを題材にした宗教画とは、一線を画しています。神々も人間っぽく描かれています。先述の通り、ルネサンスとは古代ギリシャ・ローマに立ち返り、人間的な世界観を取り戻すことを意味します。つまり、この作品こそが“ルネサンス絵画”なのです。また、この2作品は、いずれも油彩画ではなく、テンペラ画です。テンペラ絵の具は、油絵の具より発色が良く、経年黄変も少ないので、500年以上経った今でも、その光沢を保ち続けているのです。この作品が制作された当時、絵の具の主流が、テンペラから油絵具になりつつありました。しかし、ボッティチェリはテンペラ絵の具にこだわり、油絵の具を使い始めたのは晩年になってからのことです。テンペラ絵の具で描いたことが、かえってこの作品に良い効果をもたらしたのだと考えられます。

ところで、ボッティチェリは、どれほど深くメディチ家との繋がりがあったのでしょうか。



ヴィラ・デ・カステッロ

『プリマヴェーラ（春）』と『ヴィーナスの誕生』の2作品は、制作後、フィレンツェ郊外で共に展示されていました。そこは、世界遺産『トスカーナのメディチ家の別荘と庭園』の構成資産のひとつ、「ヴィラ・デ・カステッロ」という別荘です。完成品がこの場所に展示されていたということは、メディチ家からの依頼で制作されたことの根拠になります。両作品とも、縦約2m、横約3mサイズの大きな絵で、テーマも似ています。サヴォナローラのしよくせい粛清がなければ、もう何枚か同じような作品が見つかったかもしれません。とはいえ、今も昔も、世界遺産に展示されているとは、面白い巡り合わせです。



『マギの礼拝（東方三博士の礼拝）』  
1475年頃／ウフィッツィ美術館蔵



ボッティチェリ



ウフィッツィ美術館の外観

ウフィッツィ美術館に、ポッティチェリとメディチ家との深い繋がりを示す作品があります。『マギの礼拝（東方三博士の礼拝、1475年頃制作）』です。この作品の登場人物に注目してください。聖母マリアと幼子イエスにひざまず跪いているのが、コジモ・デ・メディチ（ロレンツォの祖父）。画面中央に、ピエロ・デ・メディチ（1416年～1469年、ロレンツォの父）。画面の左右両端に立っているのが、ロレンツォ・デ・メディチとポッティチェリです。ふたりの立ち位置が同じ高さにあることから、ポッティチェリとロレンツォが対等関係にあり、いかにメディチ家の懇意であったかが分かります。さらに、左右のふたりが、父と祖父を含めたメディチ家を支えている構図です。ロレンツォにとって、4歳年上のポッティチェリは信頼できる、兄のような存在だったのかもしれませんが。ルネサンス期のフィレンツェにおいて、最も輝いていた画家は誰だと思いませんか。それは、レオナルド・ダ・ヴィンチでもなく、ラファエロでもなく、私はポッティチェリだと思っています。ポッティチェリが『フィレンツェの歴史地区』を世界遺産へと導いたひとり、と言っても過言ではないでしょう。

中世ヨーロッパを象徴する世界遺産と絵画には、密接な関係があります。識字率の低かった中世では、キリスト教の教えを伝えるために、メッセージ性の強い絵画がその一旦を担っていました。ルネサンス期では、ギリシャ・ローマ神話も、主題・モチーフとして取り上げられて、神々が人間のように描かれるようになりました。それゆえに、世界遺産をより深く知る上で絵画を紐解くことは、とても重要になってきます。

中世の絵画には1枚1枚、ストーリーがあります。メッセージがあります。皆さんも、このような作品に出逢ったら、関心を寄せてみてはいかがでしょうか。世界遺産を学ぶ楽しみが、よりいっそう増すかもしれませんね。

沼田政弘

## <参 考>

ギリシャ神話の名称は、ローマ神話と英語名が混在して表記されることがありますので、下記の対照表を参考にしてください。ギリシャ神話は、時代を経てローマ神話に取り込まれ、いつしかローマの神々と同一視されるようになりました。西洋絵画には、ギリシャ・ローマ神話の神々が主題として描かれることがあります。神話の知識をつけると、西洋絵画の理解が深まります。

### ●オリソスの12神

ギリシャ神話	ローマ神話	英語名	備 考
ゼウス	ユピテル	ジュピター	最高神
ポセイドン	ネプトゥヌス	ネプチューン	海と川の神
ヘラ	ユノー	ジュノー	出産、結婚の女神
アテナ	ミネルヴァ	ミナーヴァ	戦いと知恵の女神
アポロン	アポロ	アポロ	学問と芸術の神
アレス	マルス	マーズ	戦争の神
アフロディーテ	ウェヌス	ヴィーナス	愛と美の女神
ヘルメス	メルクリウス	マーキュリー	商売の神
ヘファイストス	ウルカヌス	バルカン	火の神
デメテル	ケレース	セレス	農耕と大地の女神
ヘスティア	ウェスタ	ヴェスタ	かまどの女神

### ●その他の神など（一例）

ギリシャ神話	ローマ神話	英語名	備 考
ニウンペ	ニウンペ	ニンフ	妖精
クロリス	フローラ	フローラ	花の女神
ゼピュロス		ゼファー	西風の神
ホーラ		ホーラ	季節の女神

※神々の名称や解釈は、識者により異なる場合があります。

※赤字は、ボッティチェリの2作品に登場する主な神です。

※同一視かどうかははっきりしないものは、斜線を入れました。